

巻頭の ことば

学長 渡 辺 徳 二

この女子短期大学の「紀要」は、この大学の一つの顔である。いうまでもなく、これは、この女子短期大学の教学関係にたずさわる方々の研究発表の場所であり、ここに載せられた論文は、この大学の研究水準の高さを示すバロメーターであるといつて差支えあるまい。

そしてまた、この紀要は、その意味において研究者の方々の切磋琢磨の場所であり各個人研究者のレベル向上のための場でなければなるまい、と考えている。孤立した研究は、とかく独善におち入り易い。他の研究者の批判を充分に消化し、受止めて自分の発表論文の次の発展のために、營養として発表者自身がうけとめてゆく姿勢が望ましい。徒らに争い、論争し、相手をやっつける場所ではない。折角、実り多い形に、論争を發展させて、そこから新しい学風が形成されるような場所であつてほしい。

現代のように高度に發達した技術の上に成り立っている社会では、とかく分業がいよいよ細分化し、各部分は全体としての組織のルールによって硬直化される可能性がつよまっている。そこでは、生きた人間の活動というよりも、組織の一分肢としての固定された役割が強調され、個々の生きた人間は、全体としての統一行動の中に埋没され、疎外され勝ちとなる。

われわれが、この現代の巨大な生産機構の中から、いかにして脱出するか、いかにして生き生きした人間像を創りだすことができるか、このガンジガラメな管理社会の中で生きた、活力にあふれた人間像をどう画きだすかの学問的な場として、この新しい女子短期大学の紀要を当ててゆきたい。